

衛星通信と私

アイシーエス企画(株) 平間令子

私にとって「宇宙」のイメージとは、今までは「宇宙戦艦ヤマト」「ET」…ほとんど、お話の世界と紙一重の存在でした。

そんな私が何の因果か(？)、2003年に開催される「第21回AIAA 通信衛星システム国際会議(AIAA-ICSSC-21)」の事務局を担当することになり、そのご縁でつたない文章をご拝読いただくことになってしまいました。

会議はともかく、この原稿の依頼を頂いて正直とまどいました。「うーん、何も思い当たらないのも淋しい…」と、あらためて自分と宇宙何の係わりがあったか考えてみたところ、実は子供時代から身近な存在があることに思い当たりました。天文台です。

その天文台 -「堂平観測所」は、私の生まれ故郷である埼玉県の小川町、そして隣の都幾川村、東秩父村の境にある標高876メートルの堂平山の山頂に、当時の東京天文台の観測所として1962年に建設されたものです。

東京に比較的近く、アクセスが容易なこともあって、夜光観測室、極望遠鏡、ベーカー・ナン・シュミットカメラ、自動流星儀、50センチ彗星写真儀、月・人工衛星レーザー観測装置などがつぎつぎに設置され、光学天文学の先駆的な技術を導入した観測がなされたそうです。

が、そんなことは露知らず、子供の頃はドームの周りで芝滑り、中学生になれば山登りの最終地点、と星とは関係ないことの記憶のほうが強い気さえします。

そんなわんぱく少女をふくめ地元ではもっぱら「堂平の天文台」の名称で親しまれていた観測所も、昨年3月に閉鎖されてしまいました。



堂平観測所(1980年代)

都市化に伴う光害が深刻化したうえ、1999年1月にはハワイに設置された「すばる」が観測を開始し、堂平の役目は終わりを告げました。

天文台にいつでも星の観測より、芝滑りを覚えているような私ですが、夜空を見上げれば「昔はもっと星が見えていたのに」と思い、晴れた日には、自宅の窓からうっすらとみえるドームの影を懐かしみ、一抹の寂しさを感じています。

人工衛星の観測も堂平観測所で永いこと続け

られていたと聞いて、「将来こんなことになるかと判っていたら、あのころもうちょっと、熱心に勉強していたのに…」と思いましたが、後の祭りです。

宇宙に関心をもつ抜群の教育環境も猫に小判であった私は、いまや天罰観面。頓珍漢な質問をして関係者の皆さんに笑われないようひそかに汗を拭う毎日です。

そんな稚拙なスポークスマンではありますが、来るべき会議の広報をさせていただきます。ご紹介するまでもありませんが、AIAA(エアアイダブルエー)は、航空・宇宙・防衛分野の研究者や技術者3万人以上を会員とする、この分野の世界最大の国際学会です。通信衛星システム国際会議(ICSSC)は、そのAIAAが主催する『衛星通信分野を主要テーマとする国際会議』として開催されています。

AIAA-ICSSC は、1998年2月に第17回ICSSCが、横浜(日本)にて開催され、2003年4月に再び日本で第21回大会が開催されます。



AIAA 本部の前にて(2001年10月29日)

3年前の第17回大会では、「世界に飛躍するアジア」という意味をこめて、“Asia and The World: Toward 21st Century Satellite Communications Systems”というテーマを掲げました。

そして、まさに21世紀を迎えた現在、通信・放送・気象観測等々の目的で何千という人工衛星が打ち上げられています。我が国においては、通信衛星利用による通信サービスの提供が一般化するとともに、本格的な衛星デジタル放送時代も到来しています。一方で、日本をはじめアジア地域諸国の多くは、経済不況から

脱しきれず、構造改革を迫られています。

そのような状況下、AIAA-ICSSC 第21回大会では、「社会インフラの再構築に向けた衛星通信の役割」: “The Impact by Satellite Communications for Information Infrastructure”をテーマに、各国の研究者の成果発表や展示を通して、新しい方向を見つけていきたいと考えています。

会議の構成は、本体会議にさきがけて、コロキウム(サテライトセミナー)を開催。本体会議は、4日間の構成で、初日にはオープニングセレモニー、3つのプレナリーシンポジウム。あと3日間は、6会場平行で分科会を開催し、合計で30セッション・180の口頭演題が発表されます。また、併催される展示会は、この9月に完成したパシフィコ横浜の新しい展示スペース:Dホールを全面使用して3日間開催を予定しており、一般の方にもご自由にご覧いただけます。

会議初日には参加者と出展者を歓迎してのウェルカムパーティ、AIAA 選考による Aerospace Communications Award の表彰式兼昼食会、会議の最後を飾るバンケットパーティのほか、見学会やオプショナルツアー等の社交行事も予定しております。



TC-CS の委員と（モントリオールにて、左から2人目）

今は、各担当委員の皆さんと一緒に、頭をひねりつつ、プランニングをしている最中ですが、参加者の方にとって、有意義な時間を過ごしていただけるような、参加して良かったと思ってもらえるような会議にしたい、と願っています。

今年 9 月 NY でおこった不幸な出来事の為に、今世界中が、暗く不安な状況におかれています。

世界各地で開催を予定していた多くの国際会議が中止され、催行された会議でも参加者のキャンセルが相次いでいます。それこそ、通信衛星の力で、自分の家を動かなくても、電話やテレビで会議を行なうことも可能な時代になってきました。

でも、だからこそ、国際会議を開催し、世界中から集ま

った参加者が語り合い、お互いを理解しあい、共通のことをめざしていくことが大切だ、と私は感じています。

最近の宇宙関係の国際会議に共通する特徴として、従来の「技術」や「開発」ばかりを対象とするのではなく、環境や災害といった人類共通の問題に地球規模でとりくむ手段として、コミュニケーションといった人間対人間を結ぶツールとして、経済や社会インフラの再構築の手段として、宇宙技術をどのように利用するか、といった観点からの国際協力が求められているそうです。

本来、人と人を結びつけるはずである航空技術や宇宙技術が、誤った考えによって利用され、不幸な事件をうみだしていく。そんな状況や時代に終わりを告げ、宇宙産業が平和の象徴として発展していくことを願いつつ、2003 年の会議成功を目指して準備に励みたいと奮闘しています。